



ランピースキン病が家畜伝染病へ格上げに

令和8年
7月1日施行

- ランピースキン病は全身の皮膚の結節や水腫を特徴とする牛、水牛の疾病です。
- 令和6年(2024年)11月に福岡県において国内初の発生が確認され、その後、福岡県の発生農場から導入した牛に起因して、熊本県の菊池地域の3農場において発生しました。
- 発生当時は家畜伝染病予防法上の届出伝染病であり、自主とう汰や移動の自粛が求められていましたが、法改正により**家畜伝染病に格上げ**され、**殺処分、移動制限等が義務付けられました**。これに伴い、ランピースキン病防疫対策要領も改正されました。
- 本病は、感染した牛の移動とサシバエ、ヌカカ等の吸血昆虫(ベクター)による感染が主であり、**平時から、物品の持ち込みの際の洗浄、消毒、昆虫成長制御剤(IGR剤)や殺虫剤散布等による吸血昆虫対策が重要です**。



韓国で口蹄疫、ランピースキン病が発生

- 韓国において7月3日に約4か月ぶりとなる口蹄疫の発生が豚1件、牛5件で確認されました。さらに、7月11日に約1年7か月ぶりにランピースキン病の発生が肉用牛1件で確認されました。
- **発生地域への渡航は可能な限り控える**とともに、これらの国からの郵便物等は衛生管理区域内に持ち込まないようにしましょう。

※詳細は、以下より御確認ください。



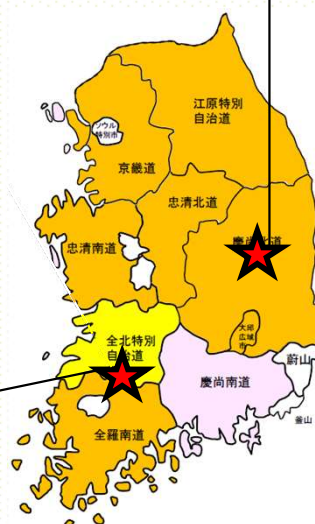
口蹄疫



ランピースキン病

2026年7月11日
ランピースキン病

2026年7月3日
口蹄疫



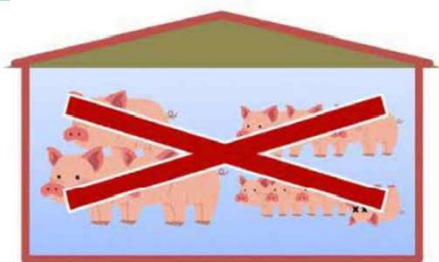
異状を発見した際は速やかに家畜保健衛生所に通報してください！



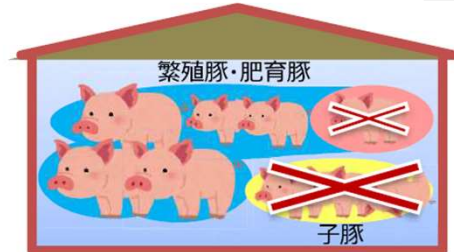


豚熱の選択的殺処分が導入されました

令和8年
5月19日施行



全頭殺処分



豚熱陰性

選択的殺処分

豚熱陽性

1. 殺処分の範囲

県が、国と協議の上、決定。

① ワクチン免疫が成立していない豚

未接種・接種後20日未経過・発育不良

※ 3回目の消毒完了後に生まれた子豚を除く。

② 症状が認められ、PCR陽性となった豚

③ その他家畜防疫員が必要と判断した豚

・接種が早すぎるなど、県の指示に従わず、
ワクチンが適切に接種されていない

⇒全頭殺処分対象

・感染が限局していない

(農場内にウイルスが広範囲に浸潤)

⇒繁殖豚を除く全頭を殺処分対象

2. 防疫措置

(1) 拡散状況確認検査

全頭：臨床検査 → 異常豚：PCR検査等

(2) 殺処分等・消毒

殺処分は1週間以内を目途に実施。

消毒は1週間間隔で3回実施。

3. 監視プログラム

○ 移動制限と毎日の報告徴求により監視。
(監視期間：約3か月)

○ 消毒完了後（発生から約3週間後）、
症状のない豚は以下が可能。

・と畜場出荷

・子豚の肥育農場への移動

(<https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/csf/attach/pdf/index-473.pdf>)

➤ 殺処分対象となった豚が飼養されていた豚房は空房にして3回消毒を実施する必要があります。また、農場内の複数の豚舎で発生が確認される等、感染が限局していない場合や、監視プログラム適用中に複数回の再発があった場合など、**繁殖豚を除く全ての豚の殺処分が必要となる場合があります。**

➤ **飼養衛生管理基準の遵守徹底と適時適切なワクチン接種**による免疫付与により、ウイルスの侵入リスクを減らし、農場内で感染を広げないことが重要です。



輸入禁止品への対応が強化されました

令和8年
7月1日施行

➤ ウイルスなどの病原体は、海外からの肉製品等の持ち込みにより、国内に侵入する可能性があります。例えば、**アフリカ豚熱ウイルスは、燻製や塩漬のハム等の中でも300日間以上感染性を失わないという報告があります¹⁾。**

1) : <https://www.naro.go.jp/laboratory/niah/asf/index.html>

➤ これらに対応するため、家畜伝染病予防法の改正により、家畜防疫官に、**外国食材店等への立入検査及び輸入禁止品の廃棄権限等**が付与されました。

➤ 令和8年1月11日には北海道新千歳空港の海外携帯品(山羊足肉)から口蹄疫ウイルスが分離されました。**海外からの肉製品の持ち込みに関する農場従事者への注意喚起、飼養衛生管理基準の遵守徹底をお願いします。**

2025～26シーズンのHPAI疫学調査について

2025～26シーズンにおける高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)は、過去20年間で最も早い発生となり、16道県24事例の発生が確認され、約576万羽が殺処分の対象となりました。

このシーズンのHPAIの特徴として以下のものが挙げられます。

大規模農場で発生

- 24事例中15事例が10万羽以上飼養の大規模農場

→飼養規模が大きいことは本病発生リスクの1つとされています。

大規模農場においては、農場の**分割管理の検討**が義務化されています。



過去に発生を経験した農場での再発

- 24事例中8事例(33.3%)が過去5シーズンのうちに発生を経験

- 2事例は3度目の発生

→一度HPAIが発生した農場は、発生リスクが高い可能性があります。

野生動物の**侵入防止対策の徹底と、その継続**を図ることが重要です。

農場HACCPの取り組みも対策強化に資すると考えられます。

飼養衛生管理基準の遵守徹底

(特に鶏舎への野生動物侵入防止、更衣、長靴交換の徹底)

+

早期発見・早期通報

これらの対応をお願いします。

近隣諸国における海外悪性伝染病発生状況

病名	型	発生地(国)	畜種(件数)	発生日月日
口蹄疫	O型	韓国	豚(1) 牛(5)	7月3日
ランピースキン病		韓国	牛(1)	7月11日
高病原性 鳥インフルエンザ (HPAI)	H5N1	台湾	家きん(4) うずら(2)	4月10日～6月17日

令和8年(2026年)7月21日現在

肉用牛の暑熱対策をテーマに講演を行いました

- 令和8年7月3日に、球磨地域肉用牛生産性向上プロジェクトの一環として、熊本県畜産農業協同組合球磨支所にて、肉用繁殖牛の暑熱対策をテーマとした講演を行いました。
- 本プロジェクトは球磨地域における肉用牛生産性基盤の強化を目的とし、令和7年8月に立ち上げられ、当所は繁殖巡回指導や飼養衛生管理技術指導により肉用繁殖牛飼養農家をサポートしています。
- 講演の中で当所から、肉用牛の体温調節機能が破綻する30℃以上の日が年々増加しており、飼養牛はかなりの暑熱ストレスを感じていること、暑熱ストレスは家畜の採食量を低下させるだけでなく、代謝などに必要なホルモン分泌を含めた生理機能に悪影響を与え、生産性や繁殖能力を低下させるため、暑くなる前からしっかりと暑熱対策を実施することが大切であるとお伝えしました。



講演会風景

～ 畜舎温度を下げるには ～

 グリーンカーテンの設置  屋根への消石灰等の塗布  換気扇による送風



※ 社団法人中央畜産会 暑熱対策リーフレット 及び 農林水産省HP より

家畜だけでなく、飼養者の方も熱中症に注意して、無理をせず暑熱対策に取り組みましょう！！

